2024.5
MAY
特別号

高知大学医学部附属病院広報誌
隔月刊［おらんくの大学病院］

RANK

急性期の被災地で「救える命を見逃さない」!

高知大学DMATに、能登半島地震での救援活動を問う。

被災地に地域医療を取り戻す!

能登半島地震における高知県JMATの活動を振り返った!

RANK
2024.5 MAY 特別号
高知大学医学部附属病院広報誌
隔月刊［おらんくの大学病院］

［発行日］2024年5月30日　［発行］高知大学医学部附属病院 広報係　〒783-8505 高知県南国市岡豊町小蓮 Tel.088-880-2723

高知大学医学部附属病院

http://www.kochi-u.ac.jp/kms/hsptl/index.html

＼広報担当者のつぶやき／

本誌を作成するにあたり、関係者の方々にご提供いただいた被災地の写真の中で、この写真が最も心に残っています。

私自身3歳と0歳の子供を持つ父ですが、子供たちは本当に些細な環境の変化にも敏感に反応します。被災による子供たちへのストレスや、それを見守る家族の気持ちを考えると胸が締め付けられる思いでした。そして、自らも大変な状況にある方々がこのスペースを作ろうと考え、力を注がれたことに心からの敬意を表します。

すべての方々に一日も早く平穏な生活が戻ることを心よりお祈りしております。

急性期の被災地で「救える命を見逃さない」！

高知大学DMATに、能登半島地震での救援活動を問う。

2024年1月1日16時10分。石川県珠洲市を震央とした能登半島地震はマグニチュード7.6、最大震度7が記録されている。高知大学医学部DMATは県の派遣要請に従い1月11日、能登町役場内に設置された能登町保健医療福祉調整本部へと向かった。

まず、本当にお疲れ様でした。近年、災害報道のたびにDMATという名前を聞くようになりましたが、活動についてお話しください。

竹内　日本DMAT（Disaster Medical Assistance Team：災害派遣医療チーム）は阪神淡路大震災の教訓から2005年4月に発足しました。

当初は倒壊した瓦礫の下からいかに人命を救うかを主とした活動でしたが、次第に水や物資、燃料などが不足している災害拠点病院の立て直し、クリニック、老人保健施設などの福祉施設の支援から避難所の支援まで活動は幅広くなっています。

災害・救急医療学 助教
竹内 慎哉

能登半島地震では発生からチーム出動まで数日のインターバルがありましたが、これは何か目処としている規約があるのでしょうか。

竹内　DMATには自動待機基準というものがあり、今回のように震度7の地震が発生した場合、都道府県、厚生労働省等からの要請を待たずに全国のDMAT隊員が待機の状態となります。今回の能登半島地震では、発災直後から自動待機となったのですが、2日の未明に中部ブロック以外は待機解除となりました。しかし、日を追うごとに被害状況が明らかになり、10日18時頃に関東・中四国にも5次隊としてDMAT派遣要請がありました。

我々高知大学チームは医師2名、看護師2名、業務調整員2名の6名編成としました。そのあたりは高橋さんや宮内教授、西山教授とも相談しながら決めました。

地域医療連携室
医療ソーシャルワーカー
高橋 武史

高橋　高知大学におけるDMATの出動に関しては、EMIS（広域災害・救急医療情報システム）に集積された情報から被災状況を把握し、派遣要請が見込まれる際には出動可能なDMAT隊員の勤務状況を確認し、正式に派遣要請があった後にチームを決定しています。

私は2011年からDMATになりましたが、EMIS以外のJ-SPEED、D24Hなど他のシステムも使用経験があることから今回もDMATメンバーとして出動することとなりました。またこれまでの活動や研修を通して他のDMATとの繋がりも深いため、よりスムーズな活動を行うことができました。

DMATの中にはロジスティックチーム隊員という、専門の養成研修を修了したロジスティクス（※）に長けた隊員が存在し、私はその隊員でもあります。近年の災害現場では、ロジスティクスが重要視されており、災害の規模・性質によっては、先遣隊として一足先にロジスティックチーム隊員が現地入りして、状況確認等を行う場合もあります。

> **〝すべては被災者のために〟がDMATのミッション**
>
> （竹内）

今回の被災地の状況やそれぞれの立場、役割からDMAT活動を振り返られていかがでしたか。

竹内　能登町では役場内の本部要員として活動しましたが、現地にはDMATが約12チームとロジス↖

※ロジスティクス：医療活動に関わる通信、移動手段、医薬品、生活手段等を確保すること

↙ティックチーム6名など総勢60名ほどが救援活動にあたりました。

我々のチームは本部活動が主で被災状況を迅速に把握した上で、追加調査、診療支援、患者搬送支援などの行うミッションを定め、ミッションを行うDMAT隊を決定・依頼し、かつ、DMAT隊が安全に活動できるよう管理することが仕事でした。

現地に行って初めに実感したのが『水が使えない』ことの大変さでした。トイレが使えないため、バケツをトイレ代わりにしたり山に穴を掘って用を足すという…。仮設トイレが到着するまでは役場のトイレの衛生状況も良くなかったようです。もちろん食器を洗う水はありませんし、お風呂も入れません。現地の医療者は自身も被災者でもあり、水の問題だけでなく、さらに自宅が倒壊しうる状況下で、患者さんを支えねばならない、という重圧がとても大きかったことでしょう。

当時、連日テレビで被災地の状況を報じていましたが、カメラに映らない、報じきれない数多くの困難が現地にはありました。しかしDMATは〝すべては被災者のために〟と考えて活動することが理念ですから、どういった状況下でも、たとえ医療以外でも、被災者が困っていれば積極的に支援します。そうすることが一人でも多くの命を救うことにつながりますので。

現場でスムーズに対応できるコミュニケーションスキルを磨きたい

（山口）

看護部
山口 ひろみ

山口　能登の活動を通して、改めてDMATのすべき仕事とは何かを考えました。DMAT活動は、現地の被災者や怪我人を助けるといったイメージを持たれていると思われますが、実際は現地の病院職員も被災者ですから、その方たちを助けて仕事をしやすくすることも私たちの役目なのです。初めて訪れる病院にはその病院なりのルールがあり、そこで夜勤をする隊員もいますので、救援活動と一口に言ってもハードルは高いのです。

現場の状況や人々に対しスムーズに対応できるコミュニケーションスキルの必要性を強く感じました。

日々どれだけ研鑽を積んでいるかが、この日のために生かされる

（高橋）

高橋　山口さんの話に関連しますが、我々のチームは能登町で活動しました。平時なら金沢から2時間半程度で能登町に到着しますが、地滑りや道路崩壊、交通渋滞で5時間以上かかりました。それほど被害が大きい状況でした。そのような状況の中、たとえば「この担当をお願いします」と言われた時に「経験もないのでわかりません」「自信がないのでできません」とは言いたくありません。さまざまな研修に参加して積んできた研鑽は、この日のためにあったのだと理解しました。

ちなみに熊本地震などは震災後1カ月ほどで水が復旧したと聞いていますが、今回被害の大きかった珠洲市や輪島市は4月現在未だ上下水道が復旧していない場所もあります。仮設住宅も、本来であれば子どもらが学び遊ぶ場所である小中学校などのグラウンドにも建設が続いている状況です。

災害時の物資調整と搬送の難しさを教訓として

（掛水）

掛水　私は能登町保健医療福祉調整本部で物資調整の業務を行い、能登町内の医療機関から要望があった水、燃料、生活用品の物資を石川県庁に設置された災害対策本部に伝えて医療機関へ供給する業務でしたが、道路状況などから必要な物資が届かないという状況が起こってしまったのです。特に上下水道が復旧しておらず飲料水は間に合っても、生活用水が枯渇する状況になりました。災害対策本部を通じて自衛隊に依頼することで、かろうじて危機を乗り越えられたのです。

また、コロナ陽性患者さんを避難所から医療機関への搬送業務も行いましたが、道路路面の崩壊や土砂崩れの上に積雪・凍結も重なり長時間の搬送となり患者の負担増加や隊員の安全管理面の難しさを痛感しました。南海トラフ地震を見据え、今回経験したことを教訓として活かしていきたいと感じました。

災害・救急医療学　救急救命士
掛水 祥延

今後の課題として、どういったことが挙げられますか。

竹内　DMATとして一番大切なのは、やはり訓練と啓発に尽きます。初めて赴く被災地で、スムーズな活動を可能にするのは日々の訓練を本気でやる以外方法がありませんし、それでも恐らく分らない事の方が多いはずです。

被災地に負担をかけることなく支援することはDMATとして活動する最低条件です。ただ、それと同じくらい、ともするとそれよりも大切なのが、我々の現地における個々の態度や言葉遣い、活動姿勢だと思います。被災地の方々は、肉体的にも精神的にも追い詰められ、その中でも必死に生活をしています。寄り添い、相手の立場に立って真摯に活動に取り組むことが求められます。

そういった状況下で、今回は各隊員の技術が生かせて、まとまった活動、仕事ができたと感じています。とはいえ次の災害時には、今回以上の活動を行うことが、また次の課題となります。

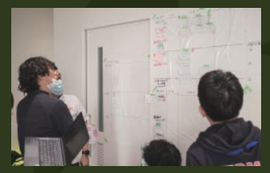
隊員の技術レベルの向上を一定にして、誰が何をしても安心して任せられるチームづくりを目標に、経験と知識を積み重ねていきたいと思います。すべては被災者のために。

活動報告 DATA

派遣期間	2024年1月11日～2024年1月19日
活動期間	2024年1月13日～2024年1月17日（5日間）
派遣先	能登町保健医療福祉調整本部（能登町役場内）
派遣隊員	竹内 慎哉（医学部 災害・救急医療学 助教） 小島 瑞貴（医学部 災害・救急医療学 救急専攻医） 山口 ひろみ（医学部附属病院 看護部） 片岡　努（医学部附属病院 看護部） 髙橋 武史（医学部附属病院 地域医療連携室） 掛水 祥延（医学部 災害・救急医療学 救急救命士）

現地で采配した主なミッション

- 宇出津総合病院の病院指揮、診療支援
- 物資搬送支援
- 施設支援（老人保健施設の診療、ゾーニング等）
- 孤立集落の診療（自衛隊とともに）
- 避難所スクリーニング（赤十字とともに）
- PPEなどの物資搬送
- 施設スクリーニング
- 診療所支援（発熱外来）
- 調剤薬局支援
- 患者搬送支援 ほか



被災地に地域医療を取り戻す！

能登半島地震における高知県JMATの活動を振り返った！

高知大学DMATが能登半島地震の救援活動を終えて2カ月。急性期を過ぎてからの被災地支援のため、高知県JMAT（日本医師会災害医療チーム）は高知大学医学部 宮内雅人教授率いる総勢5名で現地へと赴いた。

医学部災害・救急医療学教授
宮内 雅人

まず、能登半島地震でのJMAT活動、本当にお疲れ様でした。現地入りまでの経緯を教えてください。

宮内　震災後、日本医師会JMAT本部から高知県医師会に向け、診療所や避難所の健康管理がまだしばらくの間必要との連絡が入り、医師会から高知大学への要請を経てJMATを編成しました。

その活動目的は、被災地の公衆衛生の回復をはじめ高齢者や持病を抱える人々の健康管理、体調悪化等からくる災害関連死を減少させることです。

JMATは2011年の東日本大震災時に日本医師会が発足させたもので、熊本地震や令和元年台風災害などの自然災害だけでなく、ダイヤモンド・プリンセス号派遣など感染症対策でも活動を行っています。能登の活動では地元医師会と連携しながら1.5次あるいは2次避難所を回り、スクリーニング的検知から被災地の皆さんの健康管理、体調管理を確認することを任されました。

現地ではどういったスケジュールで活動されましたか。

宮内　被災地の避難所からの要請に応じ3日間活動しました。まず初日は、現地の石川県JMAT調整本部から指示があった体調のすぐれない高齢者夫婦の診療からはじまり、2日目は輪島市にある保健所内の移転作業の手伝い、3日目は未だ多くの避難者が生活する1.5次避難所を視察しました。また、毎日県庁での石川県JMAT調整本部会議、金沢以南調整支部会議にも出席しました。

私は東日本大震災の時にも被災地に派遣されました。その時は医師チームの一人として避難所で活動しましたが、被災地全体の状況や組織の動きを知る機会はありませんでした。今回は、JMAT調整本部会議に出席することで、甚大な災害の中でも本部機能の動き、各省庁でどういう人たちが、どんな役割をもって対応しているかがはっきりと見え、本部機能の重要性が認識できました。

また、視察として輪島市に向かいましたが、住民の生活で一番の問題はやはり断水の継続です。診療所では、その再開にあたっても看護師が集まらないなど、災害から2カ月半経っているとはいえ、まだまだ問題は山積していました。輪島市内のJMATの支部建物も被害を受けている中での活動で現場には拭いきれないストレスがかかったままという印象でした。

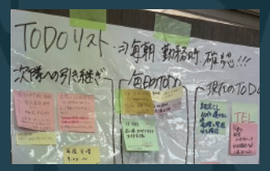
本学の学生さんたちにもJMAT活動に関心を持ってもらいたいということをおっしゃられていましたね。

宮内　そうです。南海トラフなどの震災に関わる救援活動に関して医学部の学生を対象にアンケートを取ったところ、大変多くの学生からボランティア活動参加への関心を示してもらいました。

そんな中で、大内さんが「JMATに参加して被災地の役に立ちたい！」と手を挙げてくれたことは本当に嬉しく感じました。彼女は、先端医療学推進コースの感染・災害救急医療研究班で災害時対応を専門的に学んでいます。その知識やスキルを現地で役立てられると考え、学長・医学部長・病院長にご許可をいただいて、日本医師会JMATチームの事務職として身分を保証の上、今回のチームに同行させました。

では最後に高知県におけるJMAT活動についての展望を聞かせてください。

宮内　JMATは能登半島地震では災害関連死を防ぐという大きな役割を果たし、その活動は発災初期からDMATと同様に重要となっています。高知大学は南海トラフ地震の際に、総合防災拠点として、また広域的な災害拠点病院として様々な役割があります。高知県JMATの担う役割は大きく、医師会の方々と平時から機能強化のため協力しあい、また発災時には医師会の方々、JMATと連携して最善の医療を被災者の方々に提供できるように頑張りたいと思います。



医学部4年
大内 雅子さん

能登半島地震のJMAT活動に参加して

高知大学医学部で学び、特に災害に特化したコースを履修している身として、能登半島地震のことは発災直後からずっと気がかりでした。なので、宮内先生から声がかかった時、「被災地の役に立ちたい！」と手を挙げたんです。

現地で診療の補助に入る機会があったのですが、女性の中には男性に補助されることに抵抗を感じる方もおられ、私が補助に入ることで、細やかですが患者さんのストレス軽減に貢献できたと感じました。

輪島市など特に被害が大きかった地域はライフラインの復旧が追いつかず、未だに発災直後と変わらない生活を余儀なくされています。運よく自宅に戻れても、かつての日常を取り戻せていない人も多く、その現状を目の当たりにして心が痛みました。

日本全国で災害が多発していて、日常生活と切り離して考えられない存在です。今回の経験を役立て、将来起こるであろう大きな災害に備え、学び続けたいと思います。

活動報告 DATA

派遣期間	2024年3月17日～2024年3月21日
活動期間	2024年3月18日～2024年3月20日（3日間）
派遣先	石川県庁11階　石川県医師会災害対策本部
派遣隊員	宮内 雅人（医学部災害・救急医療学教授） 倉松 佑守（医学部附属病院研修医） 宗石 康生（医学部災害・救急医療学救急救命士） 大内 雅子（医学部医学科4年生／先端医療学推進コース感染・災害救急医療研究班） 田中　教（高知厚生病院看護師）

高知県JMAT隊は3月17日に石川県金沢市に到着